

琉球大学学術リポジトリ

《社会科》社会的な見方や考え方を深め合う生徒の育成：社会参画を志向した授業づくり

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2016-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 比嘉, 利博, 玉城, 健一, 中村, 謙太, 里井, 洋一, 白尾, 裕志, Higa, Toshihiro, Tamashiro, Kenichi, Nakamura, Kenta, Satoi, Yoichi, Shirao, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35345

社会的な見方や考え方を深め合う生徒の育成

—社会参画を志向した授業づくり—

比嘉利博* 玉城健一* 中村謙太* 里井洋一** 白尾裕志**

*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

I 主題設定の理由

1 社会的背景

現代社会はグローバル化が進展している反面、資源の争奪戦や領土問題、宗教問題などから偏狭なナショナリズムも台頭している。そのため、異なる文化や文明の理解・共存とともに国際協力が必要になってくる。このような複雑な世の中では、国内外の情勢を見極める広い視点を持つとともに、将来を見通す力の育成が不可欠である。

知識基盤社会といわれる現代では、多くの知識を知っているだけでは必ずしも将来、社会で直面する課題に対して通用する確信はない。それよりも新しく得た知識を生かし、生徒一人一人が問題を発見する力や、正解のない問題や未習な問題に対して自分なりに思考・判断し解決できる力が必要である。

第4期中央教育審議会の答申でも社会科の改善事項として「我が国や世界の地理や歴史、法や政治、経済等に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を習得し、社会的事象の意味、意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明する学習などを通して社会的な見方や考え方を養う」と示し「国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」として社会科を示した。

2 これまでの研究

本校は研究主題を「未来を切り拓く対話からの学び」とし3年目を迎える。これを受け、全教科で知識構成型ジグソー法を基盤とした協調学習に取り組んできた。この学習は、生徒が共有している課題に対して、生徒が自ら考え、対話を通してその考えを他の生徒に説明したり、聞いたりしながら、自分の

考えをより質の高いものにしていく学習法である。

それを通して、2年間、社会的な見方や考え方を深め合う生徒の育成について研究を進めてきた。

昨年度は、発展課題を設定することで、課題に対して、対話の中で自分の考えを表現していることから、思考が深化している様子が見られた。また、社会科が苦手な生徒も意欲的に対話し、自分の役割を果たそうと努力する姿も見られた。生徒が主体的に活発な対話が見られた反面、主に次のような反省もあげられる。

- ・各エキスパート資料の難易度に差があり、ジグソー活動で統合が難しい生徒がいた。
- ・エキスパート活動で、グラフ・年表・写真などの図について、生徒の読み取りが弱かった。
- ・クロストークを円滑に進めるため、教師の立ち位置や、教師の発問の投げかけなどをもっと明確にする必要があった。
- ・学習評価の具体的方法が確立できなかった。

上記の反省を受け、今年度は社会的な見方や考え方の充実を図るため、ジグソー法でのエキスパート部品の作成や教師の支援などを工夫する。また、日頃の授業から意識し、生徒が図やグラフなど、いくつかの資料の関連性を読み取れるよう指導する。

3 生徒の実態

全校生徒（465名、欠席者を除く）を対象に社会科意識調査（2015年7月）を実施した。結果を見ると81%が「社会的事象について興味がある」に対し「あてはまる」「ややあてはまる」と答えており、社会的事象に対して興味を持っている生徒が多い。また「話し合い活動は好きである」との問いの結果が示すように、話し合い活動には肯定的である。そ

表1 社会科意識調査

項目	1 あてはまる 3 あまりあてはまらない		2 ややあてはまる 4 あてはまらない (%)	
	1	2	3	4
1 社会的事象について興味がある	42.4	38.6	15.8	3.3
	81		19.1	
2 社会的事象について、自分の考えを持つことができる	38.8	39.1	18.8	3.3
	77.9		22.1	
3 話し合い活動(グループ学習)は好きである	52.7	35.5	4.7	1.7
	88.2		6.4	
4 話し合い活動では、活発な議論ができる	33.9	46.4	17.2	2.6
	80.3		19.8	
5 話し合い活動では、他者の意見や考え方から、学ぶ機会になっている	69.2	28.5	1.9	0.5
	97.7		2.4	
6 話し合い活動では他者の意見と比較し、自分の考えを深めることができる	53.8	35.3	5.4	0.5
	94.1		5.9	

対象 465 名、欠席者を除く 実施 2015 年 7 月

の理由として「他の人の考え聞くことができ、自分の考えを広げることができる」や「自分の考えなかったと分かるようになる」などとなっている。

一方で否定的な意見には「自分の意見を押しつけてくる」や「発言をしない人がいて話し合いにならない」、「自分は課題に対してしっかりとした意見を持っているので、他の意見を聞かなくてもよい」など、自分の考えに他者の意見を繁栄させることに困難な状況の生徒がいる。「活発に議論することができる」と言う問いに対しては「ややあてはまる」(46.4%)が一番多いことと関連していると考えられ、どのように意識付けさせるかが教師の課題とな

ってくる。

しかしながら、97.7%の生徒が「話し合い活動が他者の意見や考えから学ぶ機会になっている」の問いに「あてはまる」「ややあてはまる」と答え、「話し合い活動が自分の考えを深めるために役立っている」と言う問いに対しても、94.1%の生徒が「あてはまる」「ややあてはまる」と答えている。これは、生徒が話し合い活動の有用性を感じていることを示している。

以上のことから、教師は生徒が主体的に問題を解決するための興味・関心が湧くような課題の提示や資料の準備が必要である。興味・関心の高い社会的事象と関連した課題を設定し、社会事象を自分のものとしてとらえさせることのできる社会参画を志向した授業を行うことで生徒の社会的な見方や考え方の深化につながると考えている。

このため主題を「社会的な見方や考え方を深め合う生徒の育成」とし副題を「社会参画を志向した授業づくり」と設定し研究を行う。

II 研究の目的

本研究は、知識構成型ジグソー法を用いて、社会参画を志向とした授業を実践することで社会的な見方や考え方を深め合う生徒を育成することを目的とする。

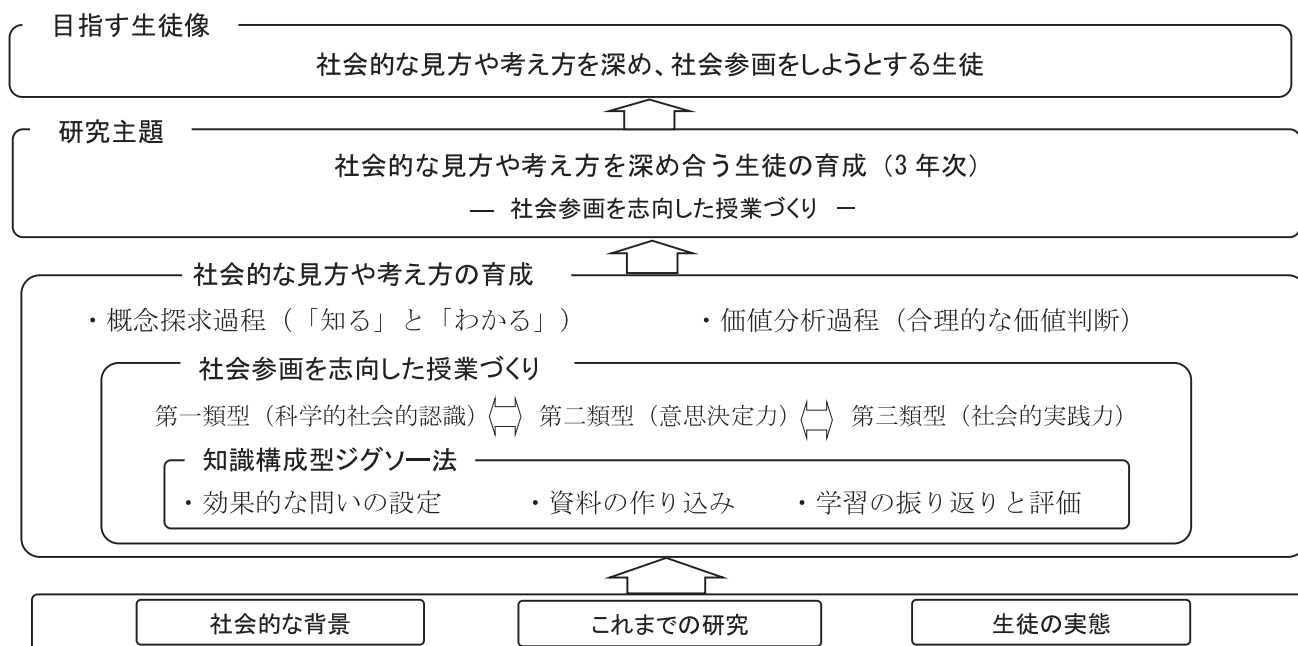


図1 研究構想図

Ⅲ 研究内容

1 社会的な見方や考え方

社会的な見方とは、数多くの具体的事実（知識）に支えられた概念で、社会的な考え方は、多くの他者に共有してもらえらる社会的な見方に基づき持つことができる価値である。

岡崎(2011)は、知識とは「個別的事象」であり「特定の事象（のため）転用（応用）できない。」⁽¹⁾ものとし、概念とは「原因・結果の関係や条件・予測の関係など、事象相互の関係性を説明した（中略）時代や国・地域を越えて転移（応用）できる知識」⁽²⁾であるとした。

また、価値とは「価値判断を伴った（中略）人間の取るべき行動規範(中略)、人間の取るべき態度の根拠」⁽³⁾と示した。

このことから社会的な見方や考え方とは、社会的な事象について、多くの具体的事実で獲得した知識を通して身についた概念を用いて思考する。そして自ら根拠や見通しを持って多くの他者に共有してもらえらる価値判断をすることと捉えることができる。

(1) 社会的な見方や考え方の深まり

岡崎によると「数多くの知識は、原因・結果の関係や目的・手段の関係などで関連づけられて概念となる。つまり、概念を獲得することが、社会的な見方が深まったといえる。すなわち、概念をもとに価値を持つことができれば、さらに社会的な見方・考え方が深まったといえるだろう」⁽⁴⁾

以上のことから、多くの具体的事象（知識）を獲得し、その知識を比較したり、関連づけたりしながら多面的・多角的に考察することで、多くの概念を獲得することができる。それが複数の価値を得ることになり、その価値の中から、自分で納得できる価値を選択し、判断をすることができるようになったとき、社会的な見方や考え方が深まったといえる。

(2) 社会的な見方や考え方の育成

岩田（2001）は社会的な見方や考え方は、概念探求過程と価値分析過程が組み合わされた指導によって身につくとした。

概念探求過程とは「説明力の大きい概念、法則性を子供が探究していく過程(中略)『知る』と『わか

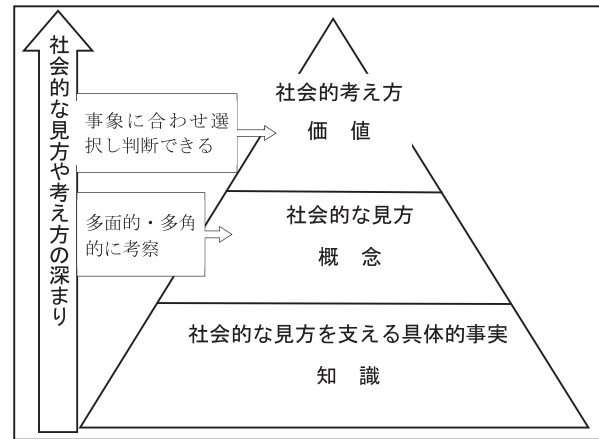


図2 社会的な見方や考え方の深まり⁽⁵⁾

る』(社会的見方)過程」⁽⁶⁾である。

ここで「知る」とは、社会的な事象を認識することであり、社会的な事象の情報を集め、いつ、どこで、だれが、なにをしたなど、具体的事実を記述した知識の習得である。また、「わかる」とは、社会的な事象の関連性を認識することであり、知り得た知識に対し、なぜ、どうして、などの疑問を用いて因果関係など、社会的な事象の相互関係を推論し、事象を説明する概念の習得である。

価値分析過程とは「価値の対立する状況の中で、価値分析を行い、合理的意志決定を行う過程である、『考える』(社会的考え方)過程」⁽⁷⁾と述べている。「考える」とは社会的な事象の諸問題に対して、何をすべきか、どう解決すべきか、について考え、最も合理的な手段や方法について一定の価値判断をすることである。

このことから社会的な見方や考え方の育成には、社会的な事象についての課題に対し、多くの具体的事象で獲得した知識を活用し、社会的な事象の持つ背景や因果関係、他の社会的な事象との関連性などについて、多面的多角的に追求・考察のする過程が必要である。そこで身についた概念を用いて、課題に対し、根拠や見通しを持って、合理的な価値判断を行っていくことで育成されると考える。

2 社会科と社会参画

一般的に参画とは活動や行事・会合などで計画立案し、実際に運営に関わることを意味する。

唐木（2010）は社会参画について、その主体は「対

等な構成員」で「自らの意思」で行動し「社会のあらゆる分野」で参画する機会が保証され、その「利益を享受する」その一方で責任感を持たなければならない⁽⁷⁾と述べている。

しかし、社会科の授業で、生徒が実際に社会参画する直接的な行動は、時間、場所、人材など多くの面で制限を受け、積極的に関わることは難しい。そのため授業では、社会参画を志向したものが中心となり、生徒が将来的に社会に参画できる資質や能力を育てる。

社会参画を志向した授業

唐木は社会参画を志向した授業を三分類し、第一類型を「科学的社會認識の育成を目指す社会科授業」、第二類型を「意思決定力の育成を目指す社会科授業」、第三類型を「社会的実践力の育成を目指す社会科授業」とした。

第一類型の科学的社會認識の育成を目指す授業とは、「ある知識を他の知識と結びつけ、知識相互の関連性を構造的に理解すること」⁽⁹⁾としており、いくつかの知識を獲得し関連づけることで科学的認識が深まる。この時、知識以外にも社会的な見方や考え方も深まる。

第二類型の意思決定力の育成を目指す授業とは、「問題解決力や批判的思考力などの能力」⁽¹⁰⁾の育成としており意思決定をするためには、自分なりに課題を解決するために比較・検討・吟味する能力が必要であり、それは自他との対話によって一層深めることができる。

第三類型の社会的実践力の育成を目指す授業とは、「何かに関心を持つこと、そして、何かをしようと考え、それを実際に行動として表すこと」⁽¹¹⁾で第一・第二類型で身につけた科学的社會認識や意思決定力を生かして社会的事象に対し、実際に行動に移す態度につながる。このような授業を繰り返し行うことが社会参画を志向する資質や能力につながる。

社会参画を志向した授業とは、第二類型は第一類型を、第三類型は第二類を、身につけたことが前提であるが、その進度具合は、一方向のみではなく、双方向的である。第二類型を終了したからといって、第三類型に進むのではなく、第一類型・第二類型を

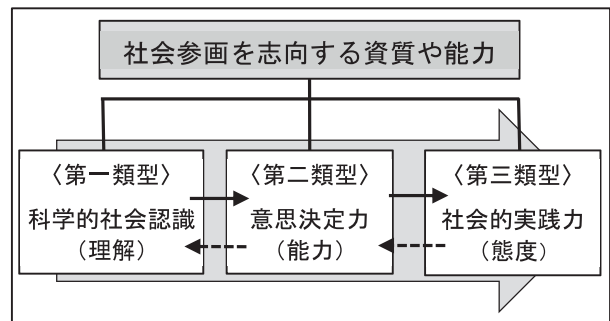


図3 社会参画を思考する社会科授業の三類型⁽¹²⁾

実施することも考えられる。生徒の定着状況を目安とし、最終的には第一類型から第三類型へと進んでいくことをさす。

本校社会科では、社会参画を志向した授業を知識構成型ジグソー法と関連させ実践していく。

4 社会科における知識構成型ジグソー法

生徒は将来を見据え「どうすれば問題を解決することができるか」「よりよい社会を作ることができるか」など、新たな社会的事象の課題に出会ったとき自分の考えを確かなものにする必要がある。それは、自分自身の考えを対話を通して再構成することで生徒の社会的見方や考え方を深める事で得られる。そのためにも教師の手立てが必要となってくる。

(1) 効果的な問いの設定

授業で生徒の考えを活発にさせる要素に問いがある。どのような問いを設定するか、で生徒の社会的な見方や考え方の深まりにも関わってくる。

安野(2006)は問いとは「何を根拠に(どのような資料や事実から)、どこを見て(どのような面について)、だれの立場で、何を考えるか」⁽¹³⁾と述べている。また、「多様な考えを引き出す『開かれた発問』(オープン・クエスチョン)と、ある一つの決まった答えを求める『閉ざされた発問』(クローズド・クエスチョン)」⁽¹⁴⁾があり、「クローズド・クエスチョンで事実を押さえさせ、オープン・クエスチョンで多様な意見を引き出すなど、(中略)意図的につかいはける」⁽¹⁵⁾ことが大切とした。

知識構成型ジグソー法においても、課題をいかに生徒自身のこととしてとらえさせ、社会的事象に関心を持たせるものにできるか、がカギとなる。社会

科では課題の解決には、統計グラフ・絵・写真などの資料を用いて様々な事実を読み取らせ、ある社会的事実について自分なりの解釈を持たせる。

社会科ではオープン・クエスチョンを発展課題として設定することで、生徒間の対話が活発になり、社会的な見方・考え方を深化につながる。

(2) 資料の作り込み

知識構成型ジグソー法では、各資料の準備を主に教師が担う。教師がどのような資料を準備するかによって対話の質が決まる。教材の準備を通して、授業を方向付ける。とくに対話の活性化のため、そのエキスパート資料は写真、グラフ、地図、文章、図などが考えられるが、共通の課題に対し、関連性を持たせながらも、いかに異質性のものを準備し、対話を活性化させることができるものでなくてはならない。そして対話を繰り返すことで、比較・検討・吟味し、社会的な見方や考え方を深めさせることができる。その結果、クロストークでも多くの意見が交わされ、社会的な見方や考え方が一層深まり、自分なりの考えを持つことができる。そのため教師は、生徒の発言が生きるよう、つなぐことが求められる。

(3) 学習の振り返りと評価

知識構成型ジグソー法においても振り返り活動は、社会的事象の特色や意義を捉えさせるための重要な活動である。三宅(2015)は「個々人が他者とのやり取りを通じて自分の考えをどれだけ良くできたか」⁽¹⁶⁾と述べている。これは課題に対する生徒の最初の考えが、一連の学習過程を通して最後にどのように変化したか、ということを示している。これは生徒の社会的見方や考えた方がどのように変化し、深まりを見せたかにもつながり、課題に対してしっかりとした根拠を持って自分の考えを示すことができるかが評価の対象となる。そのための材料となるのが生徒の発言の変化に加え、生徒の思考が見えるワークシートなどがある。岩田は「表現活動を何回か書かせ、それを自ら比較して自分の成長を自覚させる」⁽¹⁷⁾ために、自己評価を行わせ、「自分の成長を書くことができたなら、有効性の高い自己評価ができたことになる」⁽¹⁸⁾とした。この自己評価を教師が利用して、それを評価すれば、その生徒にそくし

た評価となり、授業改善にもつながり、評価と指導の一体化が図られ、次の授業へつながることになる。

IV 授業実践

1 1学年実践事例【地理的分野】

3章 世界の諸地域 6節 オセアニア州

(1) 主題

「なぜオーストラリアには様々な国の人が住んでいるのだろうか」

(2) 目標

オセアニア州に暮らす人々の生活の様子を自然環境に視点をあて、オーストラリア大陸と周辺の島国の環境など大観し、自然環境と農業や産業との関係や特徴を捉える。また旧宗主国イギリスとの関係を保ちながら、アジアとのつながりを深めていることや多文化社会についても考えさせていきたい。

(3) 本実践の目的

本単元は学習指導要領地理的分野、内容(1)世界の様々な地域、ウ、世界の諸地域に位置づけられ、各州に暮らす人々の生活の様子を把握できる地理的事象を取り上げ、それを基に主題を設けて、それぞれの州の地域的特色を理解させることを目的としている。オセアニア州では「なぜオーストラリアには様々な国の人が住んでいるのか」という問いを立てオーストラリアとヨーロッパ諸国、アジア諸国との関係を歴史的背景や地理的、経済的なつながりから追究させていきたいと考えた。そして白豪主義から多文化主義政策に変わってきたことから「多様な文化を持つ人々が協力して暮らしていくためには何が必要か」という発展課題に取り組み、自分事として考えることが、社会参画を志向した授業づくりにつながることを考えて設定した。

(4) 実践内容

「オセアニア州」を学習する前に1学年(152名、欠席者を除く)にアンケートを実施した。アンケートの質問は「オセアニア州にある国は」「オセアニア州について知っていることは何ですか」とオースト

ラリアについての質問を行った。オセアニア州にある国についてはオーストラリア、ニュージーランド、ツバルなど 2, 3 カ国しかし知らない生徒がほとんどで、南半球にある国、日本と季節が逆になっているなどと答えている生徒が多かった。

表2 学習前アンケート

1 オーストラリアの首都はどこですか。				
シドニー	パース	キャンベラ	メルボルン	その他
67%	4%	41%	3%	1%
2 オーストラリアで多くつくられている農作物はどれだと思いますか。				
小麦	米	果実	羊毛	その他
22%	4%	25%	42%	7%
3 オーストラリアで多くとれる資源はどれだと思いますか。				
石炭	石油	天然ガス	鉄鉱石	その他
16%	24%	29%	24%	7%
4 次の国でオーストラリアと1番関係の深い国はどれだと思いますか。				
日本	イギリス	中国	その他	
22%	65%	4%	9%	

アンケート結果からオセアニア州についてはこれまで学習してきたアジア州、ヨーロッパ州に比べて既習知識が少ない生徒が多いことが分かった。

表3 単元計画

流れ	学習内容	生徒の活動
これまでに	世界の姿 世界各地の人々の生活と環境 アジア州 ヨーロッパ州	地名や面積、人口などから世界を大観する 世界の気候や衣食住や文化の違いを捉える アジア州、ヨーロッパ州の地域的特色を理解する
1	オセアニア州の自然環境	オセアニア州の自然環境を大観する
2	オセアニア州の産業	オーストラリア大陸と周辺諸国の自然環境と農業や産業について考える
本時	オセアニア州移民と多文化社会について	移民を受け入れた背景と多文化社会について考える (エキスパート活動→ジグソー活動→クロストーク)
この後	南北アメリカ州、アフリカ州	移民と多文化社会 大航海時代、帝国主義 現代社会の特色、多文化社会

① エキスパート活動

本時の問い「なぜオーストラリアには様々な国の人が住んでいるのだろうか」について、移民の移り変わり、貿易相手国の移り変わり、オーストラリアの歴史という3つのエキスパート資料から本時の問いを考え、その後の発展課題につなげられるようにした。

エキスパートA 移民の移り変わりから考える

資料からオーストラリアに移住する人々の出身地の変化について読み取る。1945～74年まではイギリス・アイルランド・その他ヨーロッパ諸国から移民してきたことが読み取れる。1975～2008年には東アジア、東南アジアからの移住が増え、同じオセアニア州の島国からの移住も増えてきた。その理由について考えるようにしたい。

また、様々な国々から移住しているので、オーストラリア政府もその国の文化を認め、尊重し合う政策を進め、英語以外の言語によるテレビ、ラジオ放送や外国語教育にも力を入れていることにも気づかせたい。

エキスパートB 貿易の移り変わりから考える

資料からオーストラリアの貿易相手国の変化について読み取る。1960年代までの最大の貿易相手国はかつて植民地として支配していたイギリスであること、70年代からは日本やアメリカ合衆国など環太平洋の国々が貿易の中心になってきた。近年は中国をはじめとするアジアの国々との貿易が増えていることを読み取ることができるようにする。アジア諸国との貿易が増えてきた要因の1つとしてオーストラリアとの距離も関係しているので地図に書き込めるようにした。アジア太平洋経済協力会議 (APEC) の開催など太平洋を取り囲む国の経済協力を進めていることも考えさせるようにしたい。

エキスパートC 歴史から考える

オーストラリアの先住民アボリジニとイギリスからの移民、ゴールドラッシュや仕事を求めてアジアやオセアニアからの移民が増えてきたことからオーストラリア政府が白豪主義政策を行ったこと。第二次世界大戦後、労働者不足による懸念から多文化主義政策に転換してきたことなど、政策転換の理由もオーストラリアの歴史的背景を踏まえて考えていけるようにした。



図4 エキスパート活動の様子

② ジグソー活動

エキスパート活動から得た知識をもちより、資料からわかったことをグループのメンバーに伝え、本時の問いについて考えて意見交換をしていく。3つの視点からオーストラリア政府の政策やイギリスやヨーロッパ諸国、アジア諸国との関係をつなげて考えをまとめることができるようにした。



図5 ジグソー活動の様子

③ クロストーク

ジグソー活動で考えたことを基に、各グループの考えや意見を聞き、新たにわかったことや気になったことをメモしていく。その後、もう一度自分の考えを見直しまとめていく。



図6 クロストークの様子

④ 実践の考察

(ア) 生徒の学習の評価

生徒の授業前とジグソー活動後の変容について次の表にまとめた。生徒は各エキスパート資料から分かったことをまとめグループに伝えることができるようにした。ジグソー活動では学習課題についてわかった事を伝え、本時の問いについて考えて話し合う様子が見られた。

表4 学習課題に対する生徒の変容

生徒A	授業前	住みやすくて作物が育ちやすいから。 ⇒地形や気候だけで予想している。
	ジグソー活動後	アジアの国々との貿易が増えて、仕事の無いアジア人が移民してきた。ゴールドラッシュなどで中国人などが移住してきたと思う。 ⇒アジアとの関係が深まっていることは分かったが、イギリスとの距離やオーストラリアの歴史的な背景について関連づけて考えることができてない。
生徒B	授業前	イギリスの植民地だったから。 ⇒植民地だったことは知っている。
	ジグソー活動後	第2次世界大戦の後、オーストラリアは労働力が不足したことで、政府が多文化主義政策へと転換し移民を受け入れた。また、アジアの国々の技術が上がっているから、オーストラリアの経済の発展に活かしていった。 ⇒オーストラリアの歴史から政府の政策を考えることができたが、アジア諸国との結びつきについては具体的に考えることができない。
生徒C	授業前	イギリスの植民地だったからイギリス人が多い。⇒植民地だったことは知っている。

	ジグソー 活動後	<p>オーストラリアに様々な民族の国民がいるのは、第2次世界大戦後、労働力不足で多くの移民を受け入れたから。</p> <p>アジアなどイギリスよりも近い国々と貿易ができるようになったことで、交通網が発達してきたことも大きく関わっているのではないかと思います。</p> <p>⇒オーストラリアの歴史から労働者不足から多文化主義政策に変わってきたことが分かり、さらにアジア諸国との関係がなぜ深まったのか考えることができている。</p>
--	-------------	---

本時の学習課題について、クロストーク終了後、自分の考えをまとめ発展課題「多様な文化を持つ人々が協力して暮らしていくためには何が必要か」について考えさせた。

表5 発展課題に対する生徒の考え

生徒A	相手の国の文化を理解し、助け合ったり交流したりする。
生徒B	多様な文化を持つ人々が集まっているからいろいろな異なった事があるけど、その文化をそれぞれが理解して暮らしていく。
生徒C	たくさんの人が集まる場所や役所などの場所に、様々な国の言葉で書いてあるかんばんを作ったり、アナウンスをしたりする。その他にも自分の国以外のことについて学び、その国の文化について理解を深める。
(生徒ワークシートより原文ママ)	

発展課題について、生徒Aは相手の国の文化を理解することは考えたが、具体的にどのようなことをしたらいいのか、自分事として考えることがうまくできなかった。

生徒Bは多様な文化を持っている人がいること、相手の国の文化を理解することはまとめているが、抽象的に考えている。

生徒Cは相手の文化を理解するために学ぶことや異文化の人と一緒に暮らすことをイメージして具体

的に考えまとめることができた。

(イ) 授業デザインの振り返り

授業実践を通して既習事項の世界各地の生活と環境、気候帯の特徴や生活文化、宗教などの内容は定着していると思われる。しかし、オーストラリアについては首都や日本と季節が逆などは知っているが、それ以外はほとんど知らない状況である。本時の問いについては地形や気候など既習事項から考える生徒が多く、イギリスの植民地だったということは知っているが、歴史的な背景から考える生徒は少なかった。またエキスパート資料からイギリスやヨーロッパの国々からアジア諸国やアメリカ合衆国との関係が深くなってきたことはわかったが、なぜ変わったのか、どのような理由があったのか資料を関連づけてまとめる生徒が少なかった。継続して資料の読み取り、関連づけて考えることを徹底していきたい。

(ウ) 実践を踏まえた授業の改善点

課題の設定やエキスパートの設定は生徒が記入したワークシートやエキスパート活動、ジグソー活動を見て適当だったと考える。しかし各エキスパート資料を関連づけて意見を言ったり考えたりすることがうまくいかなかったグループがあった。これからも資料の読み取りから自分の考えをまとめる、友だちに自分の言葉で伝えることを継続して取り組んでいく必要があると感じた。

エキスパート資料の補助質問は簡単に設定し、そのことをジグソー活動ではうまく伝えられたグループは学習課題について考える事ができていた。ワークシートにも気になったことをメモできるようにして、自分の考えを書くところを中心に作成できた。できるだけ学習課題や発問、補助発問をシンプルにしたことが良かった。

クロストークでは友だちの意見を聞くことから自分の考えをまとめる事に重点を置いた。そのため気になったことはメモを取り、グループでまとめる時間を少なくして自分なりに考えをまとめ時間を多く確保することができた。

本時の学習課題から学んだことを発展課題につなげることができるように、今の社会とつなげて考え、自分事として考えることができる発問の工夫や学習課題をしっかりと立てて、エキスパート資料を比較・吟味・検討していくことが必要である。

2 2 学年実践事例【歴史的分野】

第3章 「武士による支配の完成」

(1) 主題

「琉球は、薩摩藩の『琉球侵略』により、どのぐらい支配を受けたのか」～3つの視点から考えてみよう～

(2) 目標

- ・薩摩藩の琉球侵略がどのようなものであったのかについて、琉球の主体性に着目し、認識を深めることができる。
- ・薩摩藩の琉球侵略が現在にどのようにつながっているのかについて自分なりに考えることができる。

(3) 本実践の目的

単元全体のねらいは、「江戸幕府の政治の特色を考えさせ、幕府と藩による支配が確立したことを理解させる」(学習指導要領) ことにある。その中で本時では、幕府や薩摩藩による琉球の支配のようすを取り上げ、授業実践を行う。薩摩藩の「琉球侵略」については小学校6年時に「幕府は、鎖国体制のもとで、中継貿易で繁栄する琉球王国に薩摩藩を通じて力を及ぼした。貿易の利益の多くは薩摩藩が手に入れるようになった。」ことを学習している。小学校での学びをふまえて、本授業では「琉球侵略」を江戸幕府からの視点、薩摩藩からの視点、琉球からの視点の3つの視点から多面的・多角的に考察させるために、課題を「琉球は薩摩藩の琉球侵略により、どのぐらい支配を受けたのか」と設定する。3つの視点からのエキスパート活動で得た知識を活用し、ジグソー活動やクロストークで対話を通して課題について多面的・多角的に考察することで、「小国でありながら(明や日本の) 大国のはざままで埋没せず、一定の存在感を持って歴史を生き抜いた琉球」の視点(琉球の主体性の視点)を獲得し、薩摩藩の琉球侵略がどのようなものであったのかについて生徒個々の認識を深めていきたい。

さらに、「当時の琉球の生き方から、現在の沖縄に生かすことができることはないか」と発展課題を設定し、過去の「琉球侵略」が現在とどのようにつながっているのかを考えさせる。歴史的事象を現在に

生きる自分との関わりの中でとらえることで、本校社会科のめざす社会参画を志向した授業づくりにつながると思う。

(4) 実践内容

本時の学習と前後の学習のつながりを整理したのが表6である。

表6 本時の学習と前後の学習のつながり

流れ	学習内容	生徒の活動
これまで	鎖国のもとでの交流(小学校6学年)	幕府が琉球へ影響をおよぼしたことがわかる
前時まで	3章武士による支配の完成 1 幕藩体制のはじまり 2 朱印船貿易から貿易統制へ 3 四つにしばられた貿易の窓口	江戸幕府の政治の特色を考え、幕府と藩による支配が確立したことを理解する
本時	4 琉球は、薩摩藩の侵略により、どのぐらい「支配」を受けたのか。～3つの視点から考えてみよう～	「琉球がどのぐらい支配を受けたのか」について自分の考えを説明することで、琉球侵略についての認識を深める。また現在とのつながりを考える。(知識構成型ジグソー法)
次時	5 アイヌの人々への支配	琉球への支配と比較しながら考える
この後	○ペリーの琉球来航 ○琉球処分	琉球側の視点を持ちながら、多面的・多角的に事象をとらえていく

授業実践を行うにあたり、「琉球侵略」についての授業前アンケートを実施し、生徒の認識を把握した。

表7 授業前アンケート

問1 琉球王国が中国と冊封(中国皇帝との君臣関係)を結び進貢貿易をしていたことを知っているか。

知っている	知らない
45%	55%

問2 薩摩藩が「琉球侵略」したことを知っているか。

知っている	知らない
58%	42%

問3 「琉球侵略」について知っていることは何ですか。

記述あり	記述なし
50%	50%
<ul style="list-style-type: none"> ・琉球は武器が少なくて負けた ・薩摩藩が貿易の利益を奪った ・琉球は重い年貢を納めなければならなくなった ・琉球が日本になった ・琉球の王が連れて行かれた ・その他 	

(対象：中学2年生 160人)

アンケートの結果から、薩摩藩が「琉球侵略」したことを知っている生徒は約6割にとどまっていることがわかった。また、「琉球侵略」について知っていることを記述したものをみると「琉球は武器がなくて負けた」ことや「薩摩藩が貿易の利益を奪った」「琉球は重い年貢を納めなければならなくなった」など、薩摩藩からの支配のようすの記述がみられる一方、少数だが「琉球が日本になった」という誤った認識を持つ生徒もいた。全体的には、半数の生徒が琉球侵略について知っていることへの記述がなく、琉球侵略に対する生徒の認識はかなり浅いことがわかった。

さらに、薩摩が琉球を侵略する前提として琉球と中国との冊封関係による進貢貿易があるが、そのことについて知っている生徒は5割にも満たなかった。進貢貿易による琉球王国の繁栄が、琉球侵略につながる大事な要素となるため、授業の前段階で進貢貿易について理解させるとともに、エキスパート資料でも琉球王国の貿易による繁栄についても触れることにした。本時の学習活動の流れを以下に示した

<p>(事前) 「琉球は薩摩藩の琉球侵略により、どのぐらい『支配』を受けたのか」を各自で予想する。</p> <p>導入・前時の確認 (4分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1609年以前の「鎖国」体制、琉球王国のようす確認 ・本時の問い「琉球は、薩摩藩の侵略により、どのぐらい支配を受けたのか」を提示。学習の流れを確認する。 <p>エキスパート活動 (10分)</p> <p>A 江戸幕府にとって(幕府側の視点) B 薩摩藩のねらい・琉球支配のようす C 琉球側からの視点</p> <p>ジグソー活動 (20分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○グループで本時の問いについての考えを深めていく。 ○今の時点で自分の考えをまとめる。 <p>クロストーク (8分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ネームカードで黒板に描かれた数直線上に、<u>意思表示</u>をする。 ○本時の問いについて、自分なりに考えたことを説明する。意見を交換し合う。 <p>※ワークシートに最終的な自分の意見をまとめる</p> <p>発展課題 (8分)</p> <p>「当時の琉球の生き方から、現在の沖縄に生かすことができることはないか。」</p> <p>※個人で考えさせ、ワークシートにまとめる。</p>

図7 本時の学習活動の流れ

① エキスパート活動(3人×13班 男女混合)

エキスパート活動(A): 「江戸幕府にとって」

エキスパート活動(A)は、薩摩藩の「琉球侵略」を江戸幕府の視点でとらえさせた。資料1では江戸幕府のこれまでの中国・朝鮮との関係がわかる年表を提示し、中国と貿易がしたい幕府が「琉球を利用したい」と考えていたことに気づかせる。資料2では琉球に「江戸上り」をさせ、幕藩体制下で、幕府の権威を高めたことに気づかせる。資料3では鎖国下において琉球支配は、幕府にとってはアジアの情勢を知る重要なシステムであったことなどに気づかせる。以上の3つの資料から、江戸幕府にとっての琉球侵略の意味を考えさせた。

エキスパート活動(B): 「薩摩藩のねらい」

エキスパート活動(B)は、薩摩藩の「琉球侵略」を薩摩藩のねらいや琉球支配のようすの観点からとらえさせた。資料1では、明との貿易で栄えていた琉球王国の交易のようすがわかる資料を準備し、薩摩藩が貿易の利益をねらっていたことに気づかせる。資料2では、掟十五条の一部を提示し、貿易を管理しようとする薩摩のねらいに気づかせる。資料3では、薩摩支配下での農民の税負担についての資料を提示し、琉球王府と薩摩藩への税の負担に苦しむ農民のようすを理解させる。以上の3つの資料を中心に、薩摩藩のねらいや琉球支配のようすについてとらえさせた。

エキスパート活動(C): 「琉球側の視点」

エキスパート活動(C)では、薩摩藩の「琉球侵略」を琉球側からとらえさせた。進貢貿易の継続や「江戸上り」で「異国」をアピールすることで、琉球王国としての存在感を維持したことや、「江戸上り」による日本文化との交流を通して、琉球独自の文化がさかんになったことなどに気づかせる。また、薩摩藩の役人と親密な交流を図りながらも、逆に薩摩役人の監視が任務の琉球側のスタッフがいたなどの歴史的事実から、琉球がどのように「琉球侵略」に対して対応していったかについて考えさせた。

② ジグソー活動(3人×13班 男女混合)

ジグソー活動では新たな班を編制し、エキスパート活動A、B、Cの各資料について深めた内容を持ち寄り、「琉球はどのぐらい支配されたのか」につ

いての対話を行った。ただし、ここではグループとしての意見をまとめることはせず、「話し合う」ことにとどめた。今回の問いのように、「どのぐらい支配を受けていたのか」という感覚的な問いについては、自分の意見が納得のいかないまま折り合いをつけてグループの意見としてまとめられていくことよりも、話し合いにより他の人の意見に触れることで、自分の意見を吟味していくことに重点を置きたいと考えたためである。

グループで話し合った後、問いに対する今の時点での自分の解を書かせた。「どのぐらい支配を受けたか」を表現する方法として、数直線を用いた。「完全に支配された」と「全く支配を受けなかった」を両端に置いた数直線上に自分の考えの立ち位置を表現させ、そのように判断した理由を説明させた(図8)。

問い 「琉球侵略」により、琉球はどのぐらい支配を受けたと思いますか？ 数直線で表現しよう！

受けなかった ← 完全に支配を受けた

レベル0 レベル1 レベル2 レベル3 レベル4

上記のように考えた理由は？

図8 自分の考えをまとめるワークシート

③ クロストーク

ジグソー活動を通して自分なりに考えた「どのぐらい支配を受けたか」について、黒板に描かれた数直線上に自分の考えの立ち位置を、ネームカードを貼ることで意思表示させた。誰が、どのように考えているのかを、ネームカードを見ながら確認する。その上で、なぜそのように考えたかを個人に説明させることで、意見交換を活発化させたいと考えた。さらに歴史的事象を現在に生きる自分との関わりの中でとらえさせるために、発展課題として、「当時の琉球の生き方から、現在の沖縄に生かすことができることはないか。」を個人で考えさせ、ワークシートにまとめさせた。

④ 実践の考察

(ア) 生徒の学習の評価

授業前には、「琉球侵略」に関する認識がかなり浅く、「侵略」という言葉の受ける印象や、武力で制圧されたことから、「琉球は完全に支配を受けていた」もしくはそれに近い感じを持っている生徒が多かった。授業後は、「完全に支配を受けていたわけではない」と説明する生徒が、圧倒的に多かった。その理由を生徒の記述したワークシートからみてみると、確かに幕府や薩摩の支配の意図はあったが、琉球はそれに「必死に抵抗した」「王国として存続し貿易を継続できた」「新たな独自の文化を生み出した」などの琉球側の視点がみられた。江戸幕府、薩摩、琉球のそれぞれにとっての「琉球侵略」をみる視点を獲得し、事象を多面的・多角的にとらえること(その姿勢が)うかがえた。その中で、3名の生徒を取りあげ、同じ生徒の授業前と授業後の問いに対する解がどのように変化したかを記したのが表3である。

表8 問いに対する生徒個人の変容

生徒A	<p>[授業前] 薩摩藩に負けたから、資金や貿易も制限されたかなと思う。</p> <p>[授業後] 農民は二重の税を負わされ、琉球王国側の財政も悪化して貿易も管理されながらも、琉球の文化を盛んにしたりして、<u>必死の思いで琉球王国を残そうとした</u>と思う。</p>
生徒B	<p>[授業前] 完全に支配されていたわけではないけれど、それなりの支配はされていたと思う</p> <p>[授業後] <u>江戸幕府から見ると完全に支配したようにみえるけど、琉球側から見ると、幕府がさせていた江戸上りも王国としてのアピールができるという利点はあった</u>と思います。だから完全には支配されていないと思います。</p> <p style="text-align: center;"> </p>
生徒C	<p>[授業前] 琉球は貿易を他国ともやっていたから、その関係をくずさないくらいに支配したのではないか。</p> <p>[授業後] 掟十五条や検地など、農民の暮らしはきつくなったし、江戸上りなど財政的な負担も多くなった。支配されながらも<u>琉球として貿易を続けることはできた</u>が、それは日本のねらいどおり、明との貿易をして幕府に国際情勢を伝えたり、中国のようすを伝えたりして、<u>結局は利用された</u>。</p>

生徒に期待する解は、「琉球は、薩摩藩の琉球侵略で、江戸幕府や薩摩藩の侵略を受け、貿易が管理されたり、税を取られたり、江戸上りを強制させられたりして、農民が困窮するなど苦しい思いをした。ただその中でも、琉球は進貢貿易をどうにか継続し、江戸立で異国をアピールするなどして、王国として存続するために工夫した。また、日本との交流の中から、琉球独自の文化も生み出し、逆に発展していったので、完全に支配されていたわけではなかったのではいか。」であった。期待する解の要素をもとに、3名の生徒の記述を分析すると、生徒Aは、授業前は薩摩が侵略したという側面のみから言及していたが、授業後は琉球の主体性に注目して琉球侵略をとらえているといえる。生徒Bは、授業前は具体的事象にもとづく記述が全くなかったが、授業後は幕府の視点、琉球の視点による記述がみられ、さらに具体的事象からの読み取りがなされている。生徒Cは、授業前は幕府や薩摩側からの視点のみから言及であったが、授業後は琉球にとっての貿易の意味も踏まえつつ、琉球支配について述べていることがわかる。3名のように、ほとんどの生徒が、授業前に比べると解の記述の内容が増え、自分の判断の根拠となる視点も増えていた。

(イ) 授業デザインの振り返り

「どのぐらい支配を受けていたか」という問いについて、生徒は自由に「このぐらい支配を受けていたと思う」と数直線上に自分の考えを表現したが、そう判断すると同時になぜそのように考えたのかの理由を説明する(したくなる)ことが、この問いの重要なポイントであったと考える。授業に参加しやすく、生徒それぞれが、自分なりの解を持てる楽しさを生徒の学習のようすから感じることができた。

一方で、自分の解の根拠を簡単に導き出してしまい、表現が単調になっていたり、あるいはエキスパート資料のことばをそのまま抜き出したりしているなど、さらに思考を深めよりよい解を導こうとするようすがあまり感じられなかった。自分とは違う解を持つ生徒の意見をできるだけ多く触れることができるクロストークにもっと時間をかけることで、できるだけ多くの意見に触れさせ、もっと思考を揺さぶらせることができたのではないかと考える。またエキスパート活動では、小質問を工夫して設定し、

意識させる必要があった。そうすることで、「資料が提示した一つ一つの歴史的事象が意味することは何か」「この資料から言えることは何か」を考え、自分の言葉でまとめようとする力を培いたい。それがジグソー活動での自分の言葉となり、思考を深める手助けになったかもしれない。

また、「歴史的事象を現在に生きる自分との関わりの中でとらえる」ことを意図して、発展課題として、「当時の琉球の生き方から、現在の沖縄に生かすことができることはないか。」を個人で考えさせた。生徒からは「昔の琉球の人々が守ってきた伝統文化を大事に受け継いでいきたい」など、伝統文化の継承に関する記述がとても多かった。「小国でありながら(明や日本の)大国のはざままで埋没せず、一定の存在感を持って歴史を生き抜いた琉球」の視点と現在の沖縄との関わりという点から思考を深めることを期待していたが、生徒の記述からはそこまで到達していなかった。その理由として、発展課題を提示するときの過程や手順が丁寧ではなかったために、生徒の思考の流れを止めてしまっていたのではないかとということが挙げられる。生徒の思考に即していくと、授業全体を通して「どのぐらい支配を受けていたか」について考えていたのに、突然別の課題を突きつけられたように受け止められたのだと考える。発展課題を提示する前に、「この琉球の生き方で現在の沖縄と似ているところはないか」など補助発問をするなど、生徒の思考をつなげていくような丁寧な授業デザインが必要であったと反省している。

(ウ) 実践を踏まえた授業の改善点

ジグソー法による協調学習により、琉球が「どのぐらい支配を受けたか」について、すべての生徒が何らかの判断を主体的に行い、それぞれの生徒にとって授業前よりも多面的・多角的な見方から理由を説明することができた。一方で、さらに思考を深め、よりよい解を導くためには、クロストークにもっと時間をかけることで、できるだけ多くの意見に触れさせ、思考を揺さぶらせることや、エキスパート活動で小質問を工夫して設定し、意識させることで、エキスパートからわかることを自分の言葉でまとめようとする力を培う必要がある。発展課題を提示するときは、生徒の思考をつなげていくような丁寧な授業デザインが必要である。

3 3 学年実践例【公民的分野】

第2節 「くらしを支える地方自治」

(1) 主題

沖縄の観光客数1000万人を達成するために
必要なことは何か

(2) 目標

- ・生徒自らが地方の形成に参画する意欲を持ち、具体的な地域のあり方を考えることができる。
- ・観光客の増加には、周辺諸国との関わりを深めるとともに、観光客の立場になることで、その取り組みを考えることができる。

(3) 本実践の目的

これまで沖縄について、地理的分野で沖縄の気候や産業を、歴史的分野で琉球王国を含めた歴史と文化を学習してきた。公民的分野の学習指導要領の内容(3)のイの中で「地方自治の発展に寄与しようとする住民としての自治意識の基礎を育てる」とある。それを受けて本校の特殊性から地方を沖縄としてとらえ、今後の沖縄のあり方を考えることが自ら地方の形成に参加する意欲を持ち具体的に地域のあり方を考えることができるのではないかと考えた。

(4) 実践内容

地方自治の単元で沖縄県の仕組みや、沖縄県の歳入の現状などを学習していく中で、本県は多くの他府県と同様に財政面で国への依存度が高いことがわかった。今後の沖縄を考えることは、これからの地方自治のあり方を考えることにつながる。これらのことから考えると、沖縄県の産業の発展について考えることはそれと関連する。そこで今後どのような産業が沖縄を牽引するのか、下記のようなアンケートを単元の3時間目に実施した。

表9 将来沖縄を牽引すると思う産業はどれか

順位	産業	割合
1	観光業	85.9%
2	漁業	4.3%
3	建築業	3.4%
4	IT産業	2.6%
5	農業	2.6%
6	その他	1.3%

(対象：中学三年生153人)

アンケートの結果から生徒の9割近くが今後の沖縄の牽引産業は観光業だと考えていることがわかった。これを受け、今回は「これからの地方自治を考える」という観点から沖縄の観光業をとりあげた。

しかしながら、「なぜその産業(観光業)だと思いませんか」という問いでは、「観光地が多いから」「自然がいっぱいあるから」など既存の施設や元々の自然環境をあげる生徒が多く、そのため「その産業を発展させるために必要なことは何としますか」という問いに対しても「遊園地(観光地)を作る(増やす)」、「もっとすごい施設を作る」という答えに加え、「ゴミ拾いをする」、「自然を大切にする」などが多数を占めた。これは沖縄にとって観光業が大切であるということは認識しているが、その現状についての認識は浅いことが読み取れる。

そこで地方自治を学習するにあたり、下記のような単元計画を作成した。その中でジグソー法を設定し、メインの問いに沖縄県の目標である観光客数1000万人その中に用いた。その達成に必要なものを具体的に考えることで、今後の沖縄のあり方を考えられるよう授業を展開した。

表10 単元計画

時間	学習内容	生徒の活動
1	私のくらしと地方自治 ・首長と 地方議会の役割	県や自分の市町村の議会と首長を確認し両者の仕事と関係性から地方の政治を理解する。
2	地方自治と私たち ・私たちの権利 ・地方分権	私たちに直接請求権があることや地方分権が地方自治の実現につながっていることを理解する。
3	地方公共団体と財政 ・沖縄県の財政 ・今後期待できるの アンケート	他地方と同じく、沖縄も国への財政依存が大きいことに気づき、地方分権には自主財源の増加が期待できる財源分野を考える。
4 本時	これからの地方自治を考えよう。 ・沖縄の観光客数1000万人を達成するために必要なことは何か	ジグソー法を用いて、観光業の発展を通して、これからの沖縄を考える
5	私が考える観光客増 加の具体的な方法は	メインの問いに対して、これまでの学習を生かし、自分なりの方法を考える。
自主 学習	外国人観光客に対する自治体や民間が行っている対策には、どのようなものがあるか	自分の身の周りから沖縄県がどのような対策を取っているかを調べる。 (現物、写真、レポート等)

① エキスパート活動

今回は、沖縄県が掲げる観光客数から「沖縄の観光客数1000万人を達成するために必要なことは何か」というメインの問いを設定した。

そのメインの問いに対し、「各国の経済成長率と人口増加率、三大宗教の特徴」、「外国観光客誘致の可能性、アジアの宗教分布」、「外国人観光客のニーズ」の3つのエキスパート資料を作成した。また、各エキスパート資料には、それぞれの問いを設定し、本時の問いの解決につながるものとした。

エキスパート活動(う)：「観光客をどこから誘致しますか？」

エキスパート(う)の課題を解決するための資料としては、世界の国のGDPと経済成長率が2050年までどれくらい成長するかの予測グラフを総務省の「世界の統計2015」から作成した。また、既習事項の世界の三大宗教の特徴や主な国も示した。

そのグラフから生徒は、現在欧米や日本がGDPの上位を占めているが、今後はアジアやアフリカが成長していくことがよみとることができる。また、宗教の特徴を復習することで、今後成長が見込まれるアジアやアフリカには、生徒になじみのうすいイスラム圏の国が多く、沖縄の食文化の一つである豚肉が禁止されていることに気づくことができる。

それらを踏まえて考えることで、生徒は観光客をどこから誘致するかを考えることができた。

エキスパート(む)：「沖縄は、どのような都市とつながっているだろうか」

エキスパート(む)の問いを解決するための資料として、沖縄県と直行便のある国内外の都市を示す表を作成した。それに加え、沖縄から四時間圏内で直行便を就航させることが可能な都市の地図を示すとともに、その国々の宗教分布図を添付した。

生徒は、これらの資料から、沖縄の直行便の特徴は、国内は大都市を中心に全国のほとんどをカバーできる直行便が多いことに気づくことができる。また、国外では中国や台湾、韓国、香港に直行便は多いが、偏っており、これらの国の宗教はなじみのある仏教やキリスト教であることがわかる。

このことを踏まえて、生徒は今後の沖縄県には直行便を結ぶ可能性がある外国の都市がまだあることに気づき、そのなかにはイスラム圏の国も含まれる

ことということがわかった。

エキスパート(い)：「観光客は、沖縄に何を求めているのだろうか」

エキスパート(い)の問いを解決するための資料として、五年間の国内外の観光入域者数の推移と外国人観光客数のニーズ、在沖外国人の話を提示した。

生徒は、観光客の入域者数の資料から国内の観光客数が頭打ちになっているのと対照的に、国外からの観光客数は飛躍的に増加していることを理解することができる。また、観光客の沖縄に対するニーズや在沖外国人の話からは、沖縄観光の改善点や盲点に気づくことができる。

それらを踏まえて考えると、生徒は観光客数を増やすためには、観光客の立場になって考えることが必要であると考えることができた。

② ジグソー活動

生徒はジグソー活動では、3つのエキスパートから得た知識を絡ませて、メインの問いである観光客1000万人を達成するために必要な解決策をグループで話し合った。

多くのグループが生徒は新規直行便の可能性や、観光客の立場になって考えるなど、沖縄の観光業をさらに発展させるために必要なことについて沖縄県や私たちはどのような対策を行うべきか、を話し合い、考えている様子であった。

③ クロストーク

生徒はメインの問いについて、グループで話し合ったことを発表し合った。問いに対する多くの意見を聞くことで自分の考えを再構成し、考えが深くと、考えたのである。そのため、グループの考えを発表した後、挙手で自分の意見を発言する生徒が見られた。

④ 実践の考察

(ア) 生徒の学習評価

「沖縄の観光客数1000万人を達成するために必要なことは何か」というメインの問いに対し、抽出した生徒の学習前後の考えをワークシートの記述を基に比較し、どのような変容があったかを考察した。

教師の期待する解としては、「沖縄が観光客数1000万人を突破するためには、地理的要因を生かして、直行便を新設し、経済発展を遂げている東・東南アジアの人々を呼び込む必要がある。そのために

は、観光客の立場になって観光業を考え、自分たちのよい点、改善点に気づくことが大切である。」とした。

下記の抽出生徒は、社会科で生徒Aは下位、生徒Bは中位、生徒Cは上位の生徒である。

表 11 メインの問いに対する生徒の思考の変容

生徒A	授業前	<p>沖縄には美しい海があるため、その海を汚さないようにする。</p> <p>⇒これまでの一般的に言われている、自然環境を守るという一つの視点のみである。</p>
	授業後	<p>○ エキスパート（イ）担当</p> <p>まず、<u>経済発展が進んでいる国に直行便を増やし、その国の宗教にあった料理、おもてなし</u>をすることが必要だと思う。また、語学力などもしっかりと付ける必要があると思う。</p> <p>⇒3つのエキスパートを踏まえて、考えていることが分かる。</p>
生徒B	授業前	<p>語学力高めや自然保護、グリーン活動を行う。</p> <p>⇒生徒Aと比較すると、語学力を高めという視点が含まれているが、なぜ語学力がまでは含まれていない。</p>
	授業後	<p>○ エキスパート（ウ）担当</p> <p><u>やはり外国語がしっかり話せる人が増えないと案内できなかつたりするし、外国語(アジア東部)は、必要だと思う。</u></p> <p>また、航空費を安くしたり、<u>宗教に合う店(イスラム食料)</u>や郷土料理をアレンジしたりすることが大切だと思う。このことは<u>沖縄のおもてなしの心</u>を必要としていると思いました。</p> <p>⇒エキスパート(イ)を理解することで、で外国語の必要性の要因に気づくことができた。</p> <p>エキスパート(ウ)・(ム)を統合させ、沖縄の豚肉文化と相容れない宗教への対応の重要性を考えたことがわかる。それが最後の「おもてなしの心」という言葉につながっており、相手の立場になって考えていることがわかる。</p>

生徒C	授業前	<p>沖縄の伝統文化に関連する観光スポットを作ったり、今あるものをさらによくしていくべきだと思う。</p> <p>⇒沖縄の伝統文化を生かした観光作りという視点のみである。</p>
	授業後	<p>○ エキスパート（ム）担当</p> <p>県外の人々・アジアの人々たちに対し、<u>観光しやすい環境を作って行くこと</u>だと思います。</p> <p>なぜなら、県外の人々が持つ「沖縄」という観光地は他にないものだと思うし、それをよりよくしていくことにより、これまで以上に<u>沖縄の良いところ</u>を<u>してもらえ</u>ると考えたからです。</p> <p>それに加えアジアは成長率も高く、人口も多いからです。ですが、言葉の壁等で十分に満足してもらえないと分かりました。このことから、<u>観光客が観光しやすい環境</u>を作っていくことが必要だと思いました。</p> <p>⇒エキスパート(ウ)・(ム)を関連づけながら、今後の沖縄の観光にはアジアとの関わりが欠かせないことを理解している。それに対して自分の考えをしっかりと述べている。そのためには問題点もあり、その解決法を(イ)を踏まえて考えている。それが最後の「観光しやすい環境を作って行くこと」という自分の言葉に表れている。</p>

多くの生徒が沖縄の産業で観光業は中核をなすものという既成の知識を持っていたため、メインの問いは、生徒にとっては身近に感じやすい内容であったと思われる。そのため、生徒は興味関心を持って取り組むことができ、エキスパート資料もしっかり読むことができた。

ジグソー活動やクロストークでは、エキスパート資料の影響で国内観光客の対策に比べ、外国の観光客の増加の部分が多くなってしまった。しかし本授業を通して、外国人観光客に対して、なじみのうすい宗教や相容れない沖縄の伝統的な食事など面であるために、自己本位になりがちだが、学習を通して、観光客の立場になって考える必要性に気づきをその対策を記入している生徒が多くいたことは学習の成果と言える。

本授業の発展として、「沖縄県が観光客を迎え入れるために行っていること」をテーマに生徒に自主学習を行わせた。生徒は現地へ行って調べたことをレポートにまとめたり、現物を持ってきたり、など授業後も生徒の主体的な学習につながった。

(イ) 授業デザインの振り返り

これからの地方自治を学習するに当たり「沖縄観光客数1000人を達成するために必要なことは何か」というメインの問いを設定し、それを3つのエキスパートの視点で捉えさせ、ジグソー活動やクロストークで考えを深めさせた。

当初、授業で地方自治を行うに当たり、県の施策である「21世紀ビジョン」を知識構成型ジグソー法で扱えないかと考えたが、その内容が豊富であったため、課題をその中の1つに絞り込むことにし、沖縄の基幹産業の観光業を取り扱うことにした。しかし、それでもエキスパート資料に値する要素が多く、絞り込むのが難しく、選び方によっては、数多くの授業実践につながるのではないかと考え、今後の課題となった。

今回は、学習内容が生徒の既成知識もある内容であったため、それを再構築させるという意味では適した内容であったと考える。生徒も授業後の県の取り組みについて自主的に調べ、まとめた内容を提出

表12 生徒の自主学習の内容から(一部抜粋)

生徒D	<p>【那覇空港のイスラム教の礼拝所を訪れた写真】 那覇空港の国際線に礼拝室があった。信教の差別をしないように工夫している？周りの環境に配慮して最上階にあった(目立ちにくいように)ちゃんと男女で部屋を分ける配慮があった。</p>
生徒E	<p>【那覇空港内及び空港向けバスの体験】 観光案内には沖縄を楽しむための…情報がたくさんあった。モノレールだけではなく、最近ではバスでも英語や中国語などが流され案内している。標識やレストランの案内には英語、中国語、韓国語が掻かれていて観光客に優しい。最近はビクトグラムなども用いられてさらにわかりやすい。 観光客を視野に入れているのは、ほとんど空港で今後もアジアを中心に観光客を呼び込もうとしている。</p>
制度F	<p>【あるショッピングセンターのパフレット】 外国から来た観光客でもパフレットが読めるように色々な国の言葉のものが置いてある。けど、ヨーロッパとかのものは少なかったから、ヨーロッパ系の人が少ない理由もそのこととも関係しているのかなと思った。</p>
制度G	<p>【新聞の記事(魚のエイの記事)】 沖縄のきれいな海を守るために働く人がいます。(中略)沖縄県民はゴミを捨てる人が増えています。それは自分の首を絞めているのと同様、もっと海を忌令にするためにもゴミを少しでも拾うことが観光につながると思います。「一人ひとりの思い(行動)が、沖縄の未来を背負う」</p>

するなど、主体的に取り組んだ。

(ウ) 実践を踏まえた授業の改善点

学習課題が身近な問題のため、興味関心は高く、授業全般を通して生徒は熱心に学習した。

エキスパート活動は資料の読み取りをさせようとグラフや図が中心でエキスパート(イ)の資料以外、ほとんど文書を無くし作成した。そのため若干、生徒は難しさを感じるかと思い、各エキスパートも問いを設定し、それを解決することでメインの問いにつなげる方法をとった。

そのためエキスパートの各問いを解決するのに時間がかかってしまった。エキスパートの各問いを設定する留意点としては、わかりやすく、メインの問いとの関係性をしっかりとしたものにする必要がある。

また、今回のエキスパート資料が外国の観光客の増加策に偏ってしまっただけのために、県外の観光客についての発言が少なくバランスのある内容にすることができなかった。今回は、前年度同様、前時にエキスパート資料を配付して、あらかじめじっくり読ませ授業を実施することで、授業をスムーズにすすめることができ、効果的であった。

昨年反省のもと、すべての話し合い活動ではグループの発言をしっかり聞くため、ワークシートへの記入はメモ程度とした。

クロストークでの発表もこれまでまとめた文章をホワイトボードに記入させていたがそれを無くした。

これはホワイトボードへ記入はまとめた文章をただ書くことが多く、他の生徒の席から見えづらいため、考えている内容とはいえ、文章を読み上げているだけになりがちだからである。

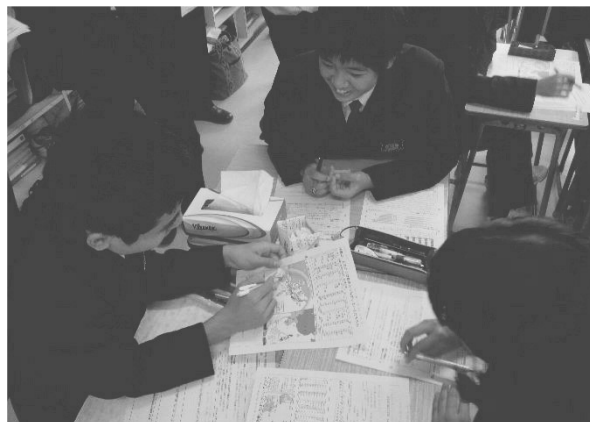


図9 ジグソー活動で自分の担当を説明している



図10 クロストークの際、自分の言葉で発表している

ホワイトボードを用いないことで、生徒は自分の考えを自分の言葉で表現することができた。そのことが多くの生徒がしっかりと発言を聞くことができ、理解しやすかったように感じられた。

その時の教師の生徒への投げかけが誘導にならないように心がけ、生徒の思考の視点が偏らない程度に生徒への問いかけを最小限にした。

また、今後はワークシートへのメモと文書でまとめの区別をしっかりと付け、話し合いの流れを切らせないような学習の展開とワークシートの作成を心がけたい。

授業後のアンケートを昨年と比較してみると昨年度より、課題に対して自分なりの考えを持つことができた割合が増加した。

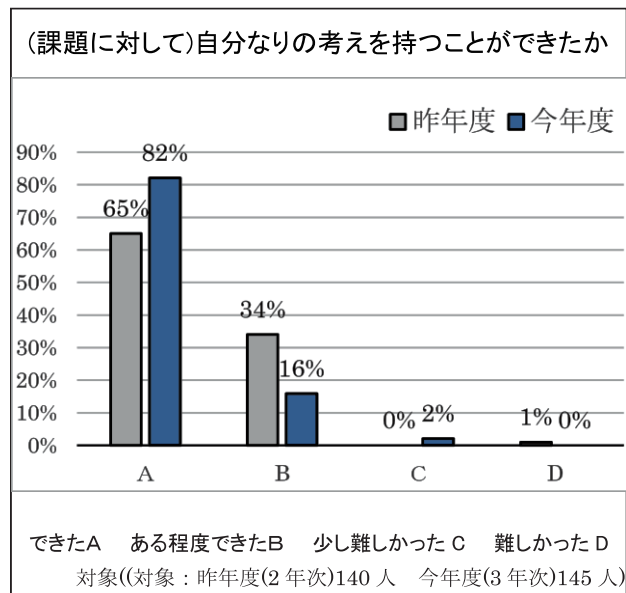


図12 生徒の授業後のアンケートの推移

この結果からメインの問いの設定が社会的事象に関心を持たせ、生徒自身のこととして捉えさせることのできるものであったことと、クロストークのときに自分の言葉で発表できたことで聞く人も理解ができ、次の発表がより深いものとなり、社会的見方や考え方が深まるという作用が生まれたためだと考える。また、3年生は知識構成型ジグソー法が3年目でその学習の仕方が昨年度より、熟知していることも考えられる。そのため今後は、知識構成型ジグソー法を含め、生徒の思考が深まる授業を生徒の実態に即して研究を進めていきたい。

V 成果と課題

1 成果

- ・生徒の身近な生活と関連する問いを設定することによって、興味関心を持つことができ、学習全般において積極的に課題に取り組む姿勢が見られた。
- ・発展課題では身近な社会を考えてもらうため教科書や既存の資料集では物足りないため、資料収集を行うため、教師の教材研究という面で深まりを感じられた。
- ・課題解決でえられた知識を用いて、発展課題を考えるため、身近な課題に対する的確な視点で取られることができた。
- ・学年が進むにつれ、生徒が活発に対話し、深い思考をしている様子が見られ、社会的な見方や考え方の深まりが見られた。これは知識構成型ジグソー法を三年間継続して行った成果とすることができた。
- ・全教科で同じ方法をとっているため、教科では気づかない視点を他教科から得られたのは良かった。

2 課題

- ・知識構成型ジグソー法は対話を活性化し、思考を促すという面では効果的であるが、問いに対する視点がエキスパートの数で絞られてしまうため、それをどのように広げるかが今後の課題である。
- ・これまでの蓄積を生かし、計画的な学習にするためにも単元を貫く課題を作成し、カリキュラムを立て知識構成型ジグソー法を組み込んでいく必要

がある。

- ・生徒の変容を見取り、次への学習に生かすために、生徒の前後を比較する必要があるが、その過程で抽出生徒をだれにするか、を決める基準が成績の面ばかりではなく、普段の行動や発言も踏まえて総合的に決める必要があった。
- ・社会的見方考え方を深めるためには、生徒がいかに関わってきたかに関わってくる。そのためには、次年度は生徒の思考を高めさせることを念頭に置き実践を行っていききたい。

文化、2009年

- ・文部科学省、(平成19年8月16日言語力育成協力者会議配付資料)、資料3-1 社会科、地理歴史科、公民科の現状と課題、改善の方向性(検討素案)一層重視する」としている。

引用・参考文献

- (1) 岡崎誠司、「見方考え方を成長させる社会科授業の創造」、風間書房、2013年、p3
- (2) 、(3) 同上、p4、括弧内筆者
- (4) 岡崎、前掲書、同上、p16
- (5) 同上、p16、図1-6を参考に作成
- (6) 岩田一彦、「社会科固有の授業理論・30の提言」、明治図書、2001年、P91
- (7) 同上、p92
- (8) 小島弘道監修「社会参画と社会科教育の創造」、学芸社、2010、唐木清志、第1章社会参画と社会科 pp7-8
- (9) 同上 pp23-24
- (10)、(11) 同上 p24
- (12) 同上 p25の図1.1を参考に作成同上
- (13)、(14)、(15) 安野功、「社会科授業力向上5つの戦略」、東洋館出版社、2006年、p89、
- (16) Coref、2015.4、協調学習 授業デザインハンドブック、http://coref.u-tokyo.ac.jp/wordpress/wp-content/uploads/2015/04/handbook_007-44.pdf、上 p34、2015.7取得
- (17) 岩田、前掲書、20014、p158
- (18) 同上、p160
- ・文部科学省、「中学校学習指導要領解説社会科編」2008年
- ・文部科学省、「言語活動の充実に関する指導事例集」中学校版、2011年
- ・琉球大学教育学部附属中学校「研究紀要」第27集 2015年
- ・田中勉 「使える社会科ベーシック2」2004年
- ・梶田叡一他、「言語力を育てる授業作り」、図書